

## ○正引 (統講)

『大無量寿経』にのたまはく、「今日世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして光顔巍巍とましますこと、あきらかなる鏡の淨き影、表裏に暢るがごとし。威容顕耀にして超絶したまへること無量なり。いまだかつて瞻覩せず、殊妙なること今のごとくましますをば。ややしかなり。大聖、わが心に念言すらく、今日世尊、奇特の法に住したまへり。今日世雄、仏の所住に住したまへり。今日世眼、導師の行に住したまへり。今日世英、最勝の道に住したまへり。今日天尊、如来の徳を行じたまへり。去・来・現の仏、仏と仏とあひ念じたまへり。いまの仏も諸仏を念じたまふことなきことを得んや。なんがゆゑぞ威神の光、光いまししかる」と。ここに世尊、阿難に告げてのたまはく、「諸天のなんぢを教へて来して仏に問はしむるや、みづから慧見をもつて威顔を問へるや」と。阿難、仏にまうさく、「諸天の来りてわれを教ふるものあることなけん。みづから所見をもつてこの義を問ひたてまつるならくのみ」と。仏のたまはく、「善いかな阿難、問へるところはなはだ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとしてこの慧義を問へり。如来無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に興するゆゑは、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。無量億劫に値ひがたく見たてまつりがたきこと、なほし靈瑞華の時ありて時にいまし出づるがごとし。いま問へるところは饒益するところ多し、一切の諸天・人民を開化す。阿難まさに知るべし、如来の正覚は、その智量りがたくして、導御したまふところ多し。慧見無碍にしてよく過絶することなし」と。(以上)

(一三五〜一三六)

## 20 釈尊が阿難の問いを嘆ずる

ここに世尊、阿難に告げてのたまはく、「諸天のなんぢを教へて来して仏に問はしむるや、みづから慧見をもつて威顔を問へるや」と。阿難、仏にまうさく、「諸天の来りてわれを教ふるものあることなけん。みづから所見をもつてこの義を問ひたてまつるならくのみ」と。仏のたまはく、「善いかな阿難、問へるところはなはだ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとしてこの慧義を問へり。

大寂定にいりたまひ 如来の光顔たへにして

阿難の慧見をみそなはし 問斯慧義とほめたまふ (五六六)

## 30 釈尊と阿難の関係

ここに「自以所見」とあるが、本経には「承仏聖旨」等とあり、この相違いかん。答う。所頤の文義、格別なり。「承仏聖旨」とは、経家主伴差別の義を叙す。伴のならい、主の指揮を受けねばならぬなり。この「自以所見」は、内徳平等の辺なり。内徳というと、仏も阿難も同じく大心海とある。出処が同様なり。差別も平等もみな入用にて、経家が入らざることを云うたということもなきなり。この主伴差別でないと、一会が調わぬ。また内徳平等でないと、かくのごとき問起は出来ぬ。釈迦と一つとより現れて、釈迦の心中、見貫いた人でなければ、この問いは出来ぬ。折角会座は調うても、無茶に問い掛けては、この経『華嚴経』になろうやら、『方等経』になろうやら、問答の善し悪しで、なに經に成るうも知れぬ。そこを動かさぬように本願を説かねばならぬように問起するは、内徳平等でなければならぬなり。(僧叡『随聞記』／『真宗全書』二一六、八二〜八三)

40

35

30

「真妙の弁才」  
「弁」・・・①弁説、②弁別 ※今は①弁説の義

**正顕本懐** (第五講〈二〇二〇年十月十九日〉参照)

5 如来無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に出興するゆゑは、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。

(如来以無蓋大悲矜哀三界。所以出興於世、光闡道教欲拯群萌恵以真実之利)

10 「如来所以興出世」といふは、諸仏の世に出でたまふゆゑはと申すみのりなり。「唯説弥陀本願海」と申すは、諸仏の世に出でたまふ本懐は、ひとへに弥陀の願海一乗のみのりを説かんとなり。しかれば『大経』(上)には、「如来所以興出於世 欲拯群萌恵以真実之利」と説きたまへり。「如来所以興出於世」は、「如来」と申すは諸仏と申すなり、「所以」といふはゆゑといふみことなり、「興出於世」といふは世に仏出でたまふと申すみことなり。(『尊号真像銘文』六七二)

15 「光闡道教」|| 聖道法

「真実之利」|| 本願名号

「真実之利」と申すは、弥陀の誓願を申すなり。(六八九)

真実功德と申すは名号なり。(六九〇)

20 ※『大経』流通分との対応

25 「光闡」等とは、教法人を利するを名て道教と為す、理を証して物を益するを以て真実と為す。光は広也、闡は暢也、恵は施也(諸師意)。今宗義に依るに「道教」と言は、ひろく一代を指す、益五乗に亘る。「真実利」とは、此の名号を指す、即是れ仏智なり。

(存覚『六要鈔』／『浄聖全』四、一〇二二)

☑一般には「光闡道教」とは広く仏教を説きあらわすという意味であるが、宗祖は「光闡道教」を聖道法、「真実之利」とは名号を意味すると解釈

**「光闡道教」がなぜ聖道法になるのか**

30 ①「欲」の字がおかれている場所

如来以無蓋大悲矜哀三界。所以出興於世、光闡道教、欲拯群萌、恵以真実之利。

如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に出興するゆゑは、道教を光闡して群萌を拯ひ、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。

35 「光闡道教」が『大経』、「真実之利」が所詮の教法とするならば、「欲」の字が「光闡道教」の上になければならない。「欲拯群萌、恵以真実之利」となっているのは、出世本懐の仏意は「光闡道教」ではなく、「真実之利」にある。

②宗祖が「光闡道教」を省略している

40 しかれば『大経』には、「如来所以 興出於世 欲拯群萌 恵以真実之利」とのたまへり。この文のこころは、「如来」と申すは諸仏を申すなり。「所以」はゆゑといふことば

5 なり。「興出於世」といふは、仏の世に出でたまふと申すなり。「欲」はおぼしめすと申すなり。「拯」はすくふといふ。「群萌」はよろづの衆生といふ。「恵」はめぐむと申す。「真実之利」と申すは、弥陀の誓願を申すなり。しかれば諸仏の世々に出でたまふゆゑは、弥陀の願力を説きて、よろづの衆生を恵み拯はんと欲しめすを、本懐とせんとしたまふがゆゑに、真実之利とは申すなり。しかればこれを諸仏出世の直説と申すなり。  
〔一念多念文意〕六八九 ※前出の『尊号真像銘文』も同様

「靈瑞華」

10 かくのごとく妙法諸仏如来、時にいましこれを説く。優曇鉢華の時に一たび現るがごとし。〔法華経〕／『大正蔵』九、七)  
優曇花とは此には靈瑞と言ふ。三千年に一たび現ず。現ずれば則ち金輪王出づ。三乗の調熟已後方に妙法を説き法王の記を授くるを表す。又酪・生蘇・熟蘇の三味を隔跨して已後乃し醍醐を説く云云。(智顛『法華文句』／『大正蔵』三四、四九)

15 如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ  
難値難見とときたまひ 猶靈瑞華としめしける (五六六)  
※「靈瑞華」に「優曇華の咲くことの稀なるが如くなり」と左訓

「いま問へるところは」

20 「阿難当知如来正覚」といふは、すなはち奇特の法なり。「慧見無碍」といふは、最勝の道を述するなり。「無能遏絶」といふは、すなはち如来の徳なりと。  
(憬興『無量寿経連義述文贊』／「教文類」引文、一三八)

- ① 今日世尊、奇特の法に住したまへり  
  || 今日世尊は、特にすぐれた禅定に入っておられます。
- ② 今日世雄、仏の所住に住したまへり  
  || 今日世雄は、煩惱を断ち世の最も雄々しいものとして、仏のさとりに入っています。
- ③ 今日世眼、導師の行に住したまへり  
  || 今日世眼は、迷いの世を照らす智慧の眼として、人々を導く徳を具えておられます。
- ④ 今日世英、最勝の道に住したまへり  
  || 今日世英は、世の中で最も秀でた方として、すぐれた智慧の境地に入っておられます。
- ⑤ 今日天尊、如来の徳を行じたまへり  
  || 今日天尊は、世の中で最も尊い方として、如来の徳(利他のはたらき)を具えられておられます。

35 ☆出世本懐の文証

- ① 化儀の表示・・・「諸根悦予姿色清浄」  || 阿難が拝見した釈尊の五徳瑞現
  - ② 仏語の宣示・・・「欲拯群萌恵以真実之利」  || 本願の思召しを釈尊自身が宣示
- ☑親鸞聖人は七高僧および他師の釈を引証することなく、釈尊の姿と言葉が仏自身の意思を顕すものとして、これらをもって出世本懐を顕す文証とされた。
- 40 ※仏語の真実性は仏陀自身によって証明される